

台北・淡水地区における複合リゾート施設の提案

—ホテルを核とした「街」空間の創出—

Proposal of resort complex in Taipei-Tansui district

日本大学大学院 坪山幸王研究室 五十嵐大輔

1. はじめに

今日、台湾にとって観光産業は国の重要な収入源となっており、国民の間は国内観光が定着している。また、訪台外国人数は、増加傾向にあり、2008年度は400万人を超えることが台湾政府によって予測されている。さらに、中国人来訪者の規制緩和が行われ、今後急激な訪台外国人数の増加が予想される。これらを受け、政府は、更なる観光市場の財源の増加や観光施設の強化を政策として打出している。観光客の増加に伴い、観光施設の開発需要は今後とも増加する傾向にある。沿岸域において言えば、政治的、気候・地形条件的、風習的理由から開発に遅れを取っていたが、経済の成熟に伴い、新たなリゾート開発の場として注目が集まっている。そこで、本案は政府が新たな沿岸域リゾート開発の場として開発を進めようとしている台北・淡水地区において、地域性や周辺環境に適合したリゾート施設を計画・設計するものである。

2. 計画背景

2.1 台湾観光市場の動向

台湾人における宿泊型の国内観光の頻度は消費動向調査によると、平均3回と高い水準で定着化している。訪台外国人数は、2008年に400万人と国の誘致目標を達成し、2008年7月からの中国人観光客規制緩和により今後は500万人以上の観光客が訪れることが予想されている。このことから、台湾観光産業は、今後ともその発展が予想される。政府は、そのような状況で、日本円で1500億円の観光産業発展基金を組み、経済政策29項目のうち、17項目が観光に関する分野であるということからも観光産業に重点をおいていることがわかる。

2.2 沿岸域リゾート開発の必要性

台湾の沿岸域は、戒厳、工業・軍事的利用の時代を経て、1987年の戒厳令解除後から現在はレジャー・娯楽などの機能を持ち始めた。政府も「経済が成熟した今、若者たちの健全な活動の場として水域遊休活動を推進すべきだ」との見解を公表している。このことから、沿岸域リゾート開発の需要は増えていくことが予想される。

2.3 台湾の観光における適正と資質

[気候] 台湾は熱帯から亜熱帯に属しており、沖縄（亜熱帯）とほぼ同じ気候だと言える。また、気温の年較差も同等のことがいえ、海洋性レクリエーション施設、リゾート施設として適地であると考えられる。

[文化・歴史] 客家や福建省など異なる民族からなる歴史や夜市をはじめとした独特の食文化、旧正月といった伝統行事など様々な観光資源を備えており、台湾観光の人気要素の一つと言える。

2.4 台北県の現状と今後の課題

[観光客の嗜好性] 観光年報のアンケート調査によると、台湾における人気観光場所は、以下の表のようになり、その大半が台北県に属していることから、台北県は台湾観光産業にとって重要な場所だということがわかる（表-1）。

表-1: 台湾における観光客の嗜好性

地域名	割合	散策コース	割合	場所	割合
1 台北	70.89%	1 北部海岸	32.49%	1 夜市	62.72%
2 高雄	18.66%	2 花東	14.99%	2 故宮博物院	44.88%
3 花蓮	13.41%	3 脊梁山脈	12.61%	3 臺北101	38.68%
4 南投	11.25%	4 日月潭	11.63%	4 臺灣民主纪念馆	35.34%
5 嘉義	8.12%	5 阿里山	8.52%	5 忠烈祠	28.52%
6 臺南	3.80%	6 雲嘉南	4.03%	6 西門町	21.98%
7 屏東	3.00%	7 恆春半島	3.76%	7 九分	18.88%
8 基隆	2.82%	8 蘭陽北横	3.65%	8 龍山寺	18.66%
9 臺中	2.67%	9 高屏山麓	2.89%	9 淡水	15.43%
10 新竹	2.11%	10 桃竹苗	2.45%	10 太魯閣・天祥	14.17%

(台湾観光年報より)

[観光開発について] 台北県においても、例外はなく沿岸域リゾート開発を進めている。台北県北西に位置する淡水地区は、年間700万人もの観光客が訪れるにも関わらず、そのほとんどが日帰りになっている傾向から政府がホテルリゾート施設の誘致を外資系企業などに働きかけている（図-1）。



図-1: 淡水地区の位置

[淡水地区の観光資源] 淡水地区には、一級史跡の紅毛城や、マングローブの原生林、古くからの老街、風光明媚なフィッシャーマンズワーフなどが存在する「東洋のベネチア」と称された、観光資源豊富な河口付近の街であり、国内外問わず、観光者の人気を集めている。

[淡水地区の開発地と交通網] 政府は、フィッシャーマンズワーフに面した一帯を「台北国際芸術大街計画地」としてホテルリゾートの誘致を行っている。交通においては、台北市からMRT淡水線を藍海線として2012年に延長し、対岸には台北港（2012年完成予定）を設け、それを淡江大橋（2010年完成予定）で結ぶ計画である。このことから、近い将来、新しい台湾の観光スポットとしての期待が高まっている（図-2）。



図-2: 淡水地区の開発計画

3. 計画方針

以上の背景をうけて本案は台北・淡水地区においてホテルを核としたリゾート施設の提案を行うものである。また、リゾートは本来、地域性や周辺環境を活用することで、その場所ならではの「リゾート性」を打ち出すことが必要である。そこから三つの計画方針をたてた。

[施設の位置づけと利用者の想定] 立地環境から都市立地型のリゾート施設とし、短期宿泊を意図した国際観光ホテルを核とする。**[地域性と周辺環境の活用]** 限られた土地の最大限の利用と、文化・歴史等の地域性の反映を行う。

[安定した集客の確保] シーズンによって左右されるリゾート施設を四季を通じた利用の検討と全天候型施設としての提案を行う。

4. 建築計画

4.1 敷地選定

敷地は、「台北国際芸術大街計画地」の一画であり、南にはフィッシャーマンズワーフ、北西には台湾では貴重な海水浴場、東の森林に囲まれた国有地である（図-3）。その他の選定理由としては、アクセスの良さ、国家風景区に隣接した景勝地であること、周辺観光資源の豊富さがあげられる。



図-3：計画敷地図

4.2 導入機能および規模計画

政府誘致マニュアルから300室のホテル施設を核とし、全天候型施設として、消費者動向と立地条件から商業施設を導入した。また、「海洋立国」としての主張を掲げながら国内の水族館数の少なさ、淡水地区の豊富な水資源を観光・学習する場所がないこと、施設自体のアメニティ性の向上から水族館の導入に至り、それらの規模を各々の類似例を参考にし、適正に算定した(表-2)。

表-2：導入機能および規模計画

部門	項目	面積(m ²)	部門	項目	面積(m ²)	
ホテル施設	客室部門		商業施設	一般		
	ツイン(303)	15150		店舗	3755	
	スイート(18)	2700		ミニシアター	200	
	その他	300		モール	6978	
	客室部門小計	23450		その他	2978	
	パブリック部門			商業施設小計	13911	
	共通	2973		公園領域	展示教育普及	3048
	宴会	1200			レクチャールーム	300
	飲食	1435			学習室	200
	付帯施設	1800			エントランス	250
その他	7184	休憩所	100			
パブリック部門小計	14592	トイレ	100			
管理部門	事務・サービス	525	水族館施設	水槽		
	調理	635		展示水槽	2000	
	機械室	1800		飼育室(キー/スペース含む)	4772	
	ハウスキーピング	590		管理・研究室	860	
	厚生施設	175		準備室	300	
	駐車場	7184		倉庫	300	
	その他	1500		機械室	3900	
	管理部門小計	4985		その他	4400	
	ホテル施設小計	43027		水族館施設合計	20538	
	施設合計			73465		

4.3 設計方針

[計画地・周辺環境との適合]

予想される新設駅や周辺観光資源から、建物で敷地を占有するのではなく、積極的にオープン化することでアクセスと連携を向上させ、周囲とのネットワーク化を図る。また、敷地からの最大限の眺望を得るために、“四方正面”の建築とする。

[景観配慮とヒューマンスケール化]

国家風景区に隣接していることから、建築高を周辺の建物以下に抑え、外観の圧迫感を低減するため外壁面の分節を行い、周辺環境との調和を図る。

[敷地の有効利用と伝統建築の体現]

限られた敷地を建蔽率最大限に活かし、伝統建築の体現として、台湾・中国の四合院の平面パターンを採用した。特徴としては、前方に水辺、後方に林を持つという外的要素と建築内部に中空空間をとる内的要素があげられる。

[台湾らしい「街」空間の創出]

・中空空間をモール化し、連続性を創出する。またモール空間では台湾ならではの夜市、イベント行事を行えるようソフトの面でも「台湾らしさ」を演出した。

・モール空間をアトリウム化することで、視覚的交流を促し、3機能の融合を図った。

4.4 空間構成・動線計画

[空間構成]

一階では、モール空間、水族館、商業施設をオープン化して設けた。地下には水族館の一部と駐車場、搬出入口を集中して設けた。メインとなるホテルロビーは二階中央にアイランド型として設け、それを内包するように、片廊下客室が2-6階に配置されている。最大限の眺望を期待できる屋上階においては、チャペル、パーラウンジ、フィットネス、スパなどリゾート性の高いものを配置した。

[動線計画]

・一階モール空間は四方からのアクセスを可能とし、各機能への玄関口を担う。さらに、周辺観光資源であるフィッシャーマンズワー

フ、海水浴場、新設駅へのアクセスを可能とし、周辺観光の活性化を意図している。

- ・ホテル施設は二階中央のロビーからモール上部のブリッジを介して各客室へとアクセスする。また、ホテル管理動線は、東側へと集約しここを基点に各客室へとサービスを行う。
- ・水族館施設利用はエントランスから地下を経て、再びエントランスへと極めて明快な観覧動線を描く。
- ・屋上施設利用者は専用エレベーターを設置することで対応した。
- ・水族館および、ホテルの搬出入スペースは、地階東側に集約することで使いやすさの重視を行った。

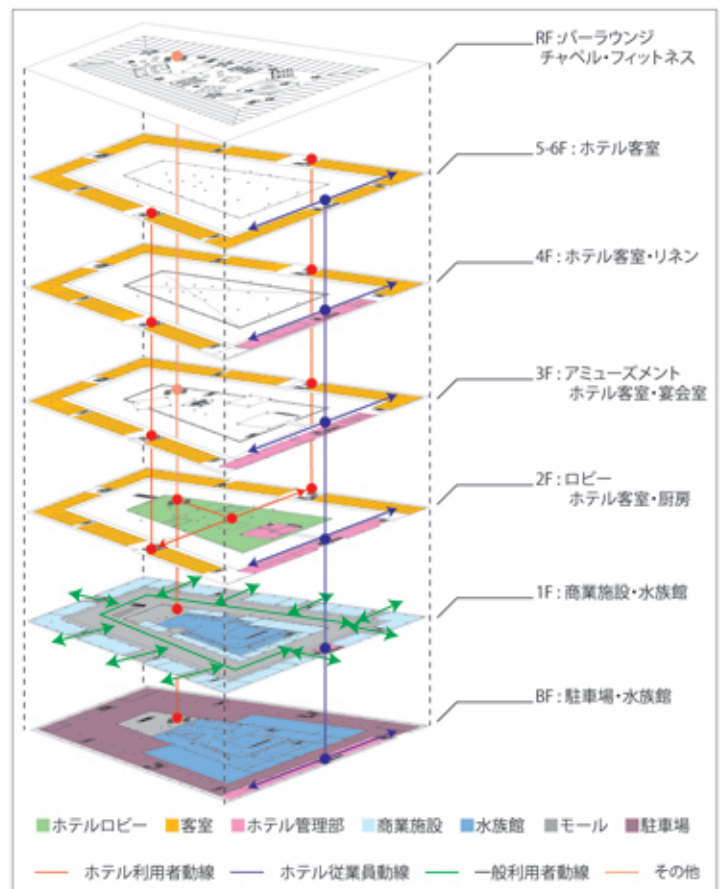


図-4：空間構成および動線図

4.5 施設計画

[ホテル施設]

・使いやすさの重視と都市型リゾートホテルの顔としての空間を演出するために中央に配置し、ほかの客用部分を視認しやすく計画する。

・客室は敷地特性を最大限活かしたオーシャンビューとし、二方向の眺望を得られる四隅にはスイートを配置した。また、台湾人が団体行動を好むといった理由からコネクティングルームを採用し家族利用にも対応した。

[水族館施設]

・展示内容は、淡水地区ならではの水資源とし、それらを学習・観覧するために、大小の水槽を用意し総合展示と分類展示を行う。

・水槽の一部をモール空間、ホテル施設に露出することで、水族館への誘引性を高めると共に、生きたディスプレイとして施設全体のアメニティ性の向上を図る。

[屋上施設]

・スパやチャペル、フィットネスなどリゾート性の高いものを利用して則した動的な配置を行うことで、アメニティ性の演出を図る。

・モール空間のトップライト部分で流水を行うことで、周辺の水辺との連続性を意図した借景を計画する。

4.6 環境計画

[夏季・猛暑への対応]

・空間をクローズし、用途によって段階的に冷房効果を適正に調節する。

・モールの高天井とすることで、暖気を上昇させ、下層部の室温低下を図る。またトップライト部分では、雨水の流水により熱負荷を軽減させる。

[中間季の対応]

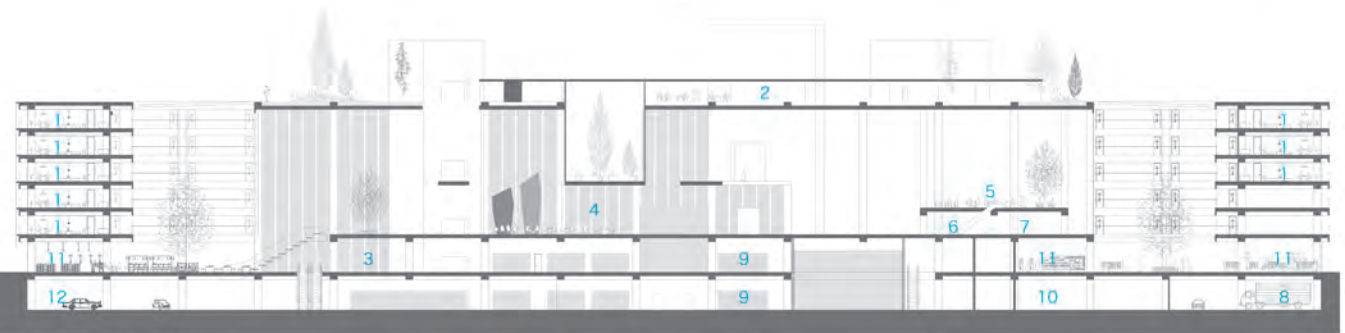
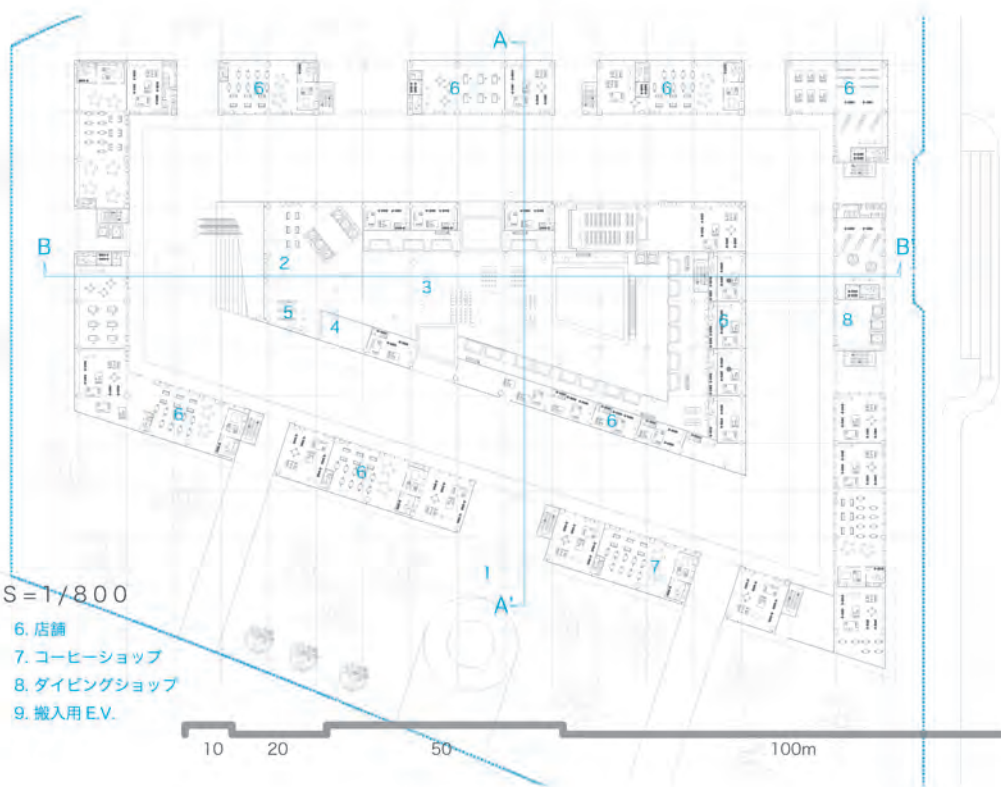
・夏季では、クローズしていた空間を積極的に開口することで通風性を図る。

・客室屋上部分ではソーラーパネルを設置し、通年電力を賄う。

1階平面図

S=1/800

- 1. メインエントランス
- 2. 水族館エントランス
- 3. レクチャースペース
- 4. 受付カウンター
- 5. 水族館店舗
- 6. 店舗
- 7. コーヒーショップ
- 8. ダイビングショップ
- 9. 搬入用E.V.



B-B'断面図

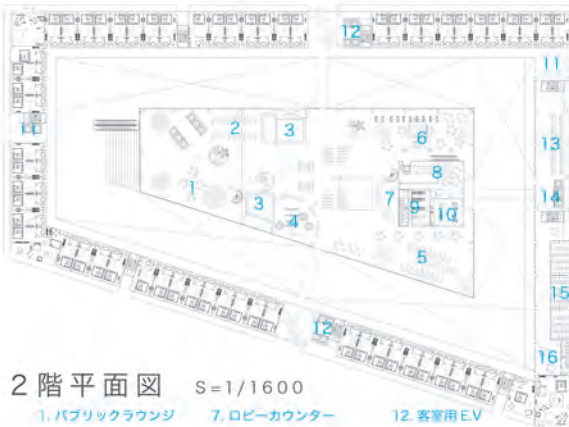
S=1/1000

- 1. 客室
- 2. スパ・フィットネスルーム
- 3. 共用エントランス
- 4. ホテルロビー
- 5. 宴会室ロビー
- 6. クローク
- 7. バックオフィス
- 8. ホテル搬入口
- 9. 水族館
- 10. 水族館搬入口
- 11. 店舗
- 12. 駐車場



北側立面図

S=1/1000



2階平面図

S=1/1600

- 1. パブリックラウンジ
- 2. コーヒーショップ
- 3. 展示水槽
- 4. 免税店
- 5. メインダイニング
- 6. ラウンジ
- 7. ロビーカウンター
- 8. バックオフィス
- 9. クローク
- 10. 厨房
- 11. サービスステーション
- 12. 客室用EV
- 13. 事務室
- 14. 搬入用EV
- 15. 食品庫
- 16. 休憩室



BF平面図

S=1/1600

- 1. タッチプール
- 2. 飼育水槽
- 3. 飼育員室
- 4. 講義室
- 5. アクアリウム機械室
- 6. ゴミ置き場・処理場
- 7. アクアリウム搬入口
- 8. サービスヤード
- 9. 機械室
- 10. 倉庫
- 11. 木工室
- 12. 印刷室
- 13. 花処理室
- 14. 酒庫
- 15. 荷解き室
- 16. 業者搬入用駐車場
- 17. 警備員室
- 18. 事務室
- 19. ファンルーム
- 20. P.S.・D.S.



モールから上部を臨む



客室廊下からモールを臨む



夜市の様子



ブリッジからモールを臨む



ロビーより他の客用部分を見る



ロビー空間の様子



鳥瞰写真



断面模型写真